

形式と意味および時間のずれ  
—物理的な時間と心理的な時間のずれに関する一考察—

伊関 敏之\*

**The Difference Between Form, Meaning and Time**  
**—A Study on the Difference Between Physical Time and Psychological Time—**  
Toshiyuki ISEKI

**Abstract**

In this paper, we will examine the difference between form, meaning and time, particularly considering the difference between physical time and psychological time.

It seems to us that linguistics has provided very useful insights on grammar.

This time, we will look at the various aspects of form, meaning and time.

Taking a careful consideration on the result of linguistics, we will also investigate the difference between physical time and psychological time in detail.

**序論**

本論文においては、文法形式と意味および時間に関するずれについて考察することを主な目的とする。その際には、「物理的な時間と心理的な時間との間にあるずれ」ということに特に注目する。

学校英文法においては、「時や条件を表す接続詞に導かれる副詞節の中では、未来の事柄を述べる場合でも現在時制を用いる」(cf. 岡田監修 1998<sup>2</sup>, p.91)という規則を導入する場面があり、この規則は英語学習者の間ではよく知られている規則であることは確かである。この規則自体は大変有名な規則ではあるが、なぜ「未来の事柄を述べるのに現在時制を用いるのか？」ということに関しては、いくつかの研究書および参考書において簡単な説明があるだけである。その説明について詳細に考察してみると、筆者にとってはあまり納得のいく説明にはなっていないのである。つまり、もちろん一理はあるけれども、説明力不足の感は否めないのである。それでは、どのように考えればよいのであろうか。

換言すれば、このような「未来の事柄なのに現在時制を用いる」という物理

---

\*北見工業大学教授 Professor, Kitami Institute of Technology

的な時間と心理的な時間のずれに関して新たな提案をすることが本論での一番大きなポイントである。

それでは、まず形式と意味のずれについて、先行研究を基に見ていくことにする。

## 1. 先行研究（形式と意味のずれについて）と英和辞典を用いた実践例

動詞の時制を考察することにに関して見ると、歴史言語学的な視点を取り入れると大変興味深いことが分かる。中尾の2冊の研究書を参考にしながら、概観していくことにする。

### 1. 1 現在時制

(1) OEでは、①現在、②未来いずれも現在時制で表される。いずれを表すかは文脈 (Context) による。

(2) MEでも現在時制は、①現在時、②未来時のいずれも表すが、LMEからは後者は shall, will による迂言的 [分析的] (Periphrastic) 構文に依存し始める。after / till / if / などの副詞節中の未来時は現在時制によるという慣用はEME以降の発達である。現在時制は、③進行構文、④現在完了を表すのにも用いられる。

(3) EModEでも、現在時制は、未来時や進行構文を表すのに用いられたが、17世紀以降は前者は shall / will / be going to などにより、後者は進行構文により、とって代られた。

#### (4) 史的現在 (Historical Present)

過去の出来事の突発性、意外性を鮮明に描写するため現在時制が用いられることがある。これを史的現在と呼ぶ。

史的現在はLMEの物語詩に現れ始め、15世紀以降は散文にもしばしばみられるようになった。しかし17世紀以降は、韻文、文学的散文を除き減少していく。PEでは says I のような定句表現を除くと口語では用いられなくなった。

### 1. 2 過去時制

OEでは、過去時制は、①過去の時、②過去よりも前の時 (before-past)、③現在完了として用いられていた。MEに入ると②は徐々に過去完了 (had+PtP) により表されていく。③はME、さらにEModEにおいても行われていた慣用であったが、その後現在完了 (have+PtP) により置換された。

なお、略語について説明しておく。

OE (Old English) 古英語 450－1150。

ME (Middle English) 中英語 1150－1500。

EME (Early Middle English) 初期中英語 1150－1300。

LME (Late Middle English) 後期中英語 1300－1500。

ModE (Modern English) 近代英語 1500－1900。

EModE (Early Modern English) 初期近代英語 1500－1700。

PE (Present-day English) 現代英語 1900－。

－中尾 1988, p.10; 1989, pp.178-9

従って、時代が進むにつれて、英文法における時制の役割分担が明確化されてきていることがわかる。つまり、迂言的〔分析的〕構文が現れてきたり、進行構文、現在完了 (have+PtP)、過去完了 (had+PtP) が徐々に表れてきたりして、現在の英語に近づいてくるのである。

◎現在時制＝現在時＋未来時＋進行構文＋現在完了から始まって、現在のよ  
うに分化した。

◎過去時制＝過去の時＋過去より前の時＋現在完了から始まって、現在のよ  
うに分化した。

なお、注目すべきことは、現在時制にも過去時制にも現在完了の用法があり、オーバーラップ (overlap) しているということである。この点についての考察は、後程行うことにする。

要するに、現在時制および過去時制は時代をさかのぼればさかのぼるほど、いろいろな機能 (用法) を有しており、いわばオールラウンドプレーヤーのよ  
うに働いていたということが分かるのである。

### 1. 3 形式と意味および時間のずれに関する具体例

#### 1. 3. 1 安藤 (1996) の説明

安藤 (1996, pp.75-9) には、大変興味深い記述がある。第7章 **I hear=I've heard の語法** という章である。タイトルを見ればすぐ分かるように、I hear と I've heard がイコールだということ、つまり現在時制と現在完了形が意味的に等しくなる時があるということを意味している。認知言語学でよく言われるところの「形が変れば意味が変わる」ということを前提にして考えれば、両者は決して同じ意味ではないということになるが、話をわかりやすくするために、両者をほぼ同じ意味であるとして論を進めていくことにする。安藤の説明におい

ての要点は次の通りである。

「Poutsma (1926) は、hear, learn, tell, ask のような、情報を受けたり、求めたりすることを示す瞬時相 (momentaneous) の動詞は、時に現在完了の代りに現在時制で用いられるとして、次の例を含む 5 例を挙げている。

(1) I hear you made a speech yesterday.

(2) He asks me to call and see her.

Jespersen (1931) は、I hear / I am told などについて、「これらの場合は、以前受け取った情報が心理的に現在時に移行されている。なぜなら、意味するところは 'I know' であるからだ」と説明している。

Strang (1968) は、see, hear のような動詞は、'being in a state resulting from having ...' という意味を含意するので、現在時制が現在完了的に用いられるとして、次の 2 例を示している。

(3) We understand you only arrived yesterday.

(4) I hear you've bought a house.

そして、この用法は、主に会話および手紙文に属するもので、普通、一人称でのみ用いられるとコメントし、ただし、see の場合は、時に二人称主語でも現在完了的に用いられるかもしれないとして、次の例を示している (もっとも、この see は、受信動詞としての see ではないと思われる)。

(5) You see I've brought my music with me.

(ほらね、楽譜を持ってきたでしょう。)

Visser は、この用法で用いられる動詞は、hear, learn, find, read, see, be told のような動詞に限られるし、これらが現在時制で用いられるのは、例えば、I hear は 'I am the recipient of the news', 'I know (now)' と意味的に等しいからであるとしている。」(一部、表記は筆者なりに改めている)

ここでは、3 名の伝統文法家の意見を引用している。昔の研究書であり、多少古いと言った感は否めないが、その有用性は今なお健在である。

その後、安藤は自説を展開している。その一部を次に見ていくことにしよう。

「まず、ask, say, tell, write の類と hear, learn, find, read, see, be told, be informed の類とを区別する。前者は「発信動詞」、後者は「受信動詞」であり、そこに若干の統語的ふるまいの違いが見られる。

受信動詞が普通、一人称主語とともに用いられることについては、受信者は常に一人称であることを思えば、当然のことでなければならない。(中略)

日本語でも事情は同じで、受信動詞の主語は一人称に限るようである。

というのは、

(6) a. ... と聞いている。

b. ... だそうです。

c. ... との由。

などの表現に主語を補うとすれば、話し手である「私」または包括的な‘we’である「われわれ」でなければならないからである。

一方、「受信動詞」の場合については、次のような記述がある。

「Leech (1987) は、(7) のような例をあげて、次のように説明している。

(7) a. Joan tells me you're getting a new car.

(ジョウンの話では、君新車を買うんだってね。)

b. The ten o'clock news says that it's going to be told.

(10時のニュースによれば、寒くなるとのことだ。)

tell, write, say などの動詞 (=われわれの「発信動詞」) は、過去におけるメッセージの発信を述べるのであるから、Joan has told me ... ; The ten o'clock news said ... のように、当然、現在完了形または過去時制が期待される。しかし、動詞の意味が発信側 (initiating end) ではなく、受信側 (receiving end) に移行しているように思われる。受け手にとって伝達はまだ有効であり、それ故現在時制が使用されているのである、と Leech は説明する。

筆者が指摘したいことは、確かに、「発信動詞」の場合は、受信動詞と異なり、主語の人称に制限はないが、受信者はやはり一人称であり、それは<着点> (goal) を表す目的語として、文脈に顕在または陰在しているという事実である。

(7a) の例で言えば、tells me の me に一人称の受信者が顕在しており、(7b) の例では、The ten o'clock news says (to us) ... というふうに、一人称の受信者が陰在している。

従って、「受信動詞」の場合も、視点は「受信者側」の置かれており、ために、現在時制の使用も可能である、説明することができる。」(一部、表記は筆者なりに改めている)

ー安藤 (1996, pp.75-9)

以上の説明は、大変明快にして有益であると筆者は考える。特に、「発信動詞」と「受信動詞」との区別立て、「発信動詞」における一人称の「顕在性」および「陰在性」などは圧巻である。ただ残念なことに、I hear=I've heard の語法ということで、I heard が抜けていることである。これが抜けているというのは、

筆者にしてみれば片手落ちである。事実、ジーニアス英和辞典第4版（以降、G 4と呼ぶ）には、次のような例が載っている（今後、ジーニアス英和辞典第3版も登場するが、G 3と呼ぶ）。

(8) I hear you're going to Egypt soon.

（近々エジプトに行かれるそうですね《◆過去に聞いた情報が今も有効な時は現在形 **hear** を用いるが **I (have) heard ...**も可》

—小西・南出(編)2006, p.919

このように、G 4は語法欄等、非常に有益な情報が多く掲載されている。つまり、**I hear**=**I heard**=**I've heard** の語法を調べるべきであるということを示唆しているわけである。ただし、上記の説明のように、G 4では **I hear** の他に **I (have) heard** も可であるとしが書かれていないので、詳細は何も分からないのである。この点については、後述する。

いずれにしても、上述の説明は、形式と意味および時間のずれに関する具体例として大変有益なものである。

### 1. 3. 2 岩垣(1980)の説明

筆者なりの解釈も加えながら、要点をまとめていくことにする。

#### ◎現在時制と主観的（心象的）現在

(1) a. Napoleon *then led* his army across the Alps.

（ナポレオンはその時軍隊を率いてアルプスを越えた。）

b. Napoleon *now leads* his army across the Alps.

（ナポレオンが今軍隊を率いてアルプスを超える。）

現在時制の根本は、状態動詞・動作動詞の区別なく「客観的通時的な事実（＝状態）」を表すところにある。ところが、(1a)のように過去の事実を述べるのであるから当然‘過去時制’を用いるべきであるのもかかわらず、(1b)のように‘現在時制’を用いている文に我々は出会うことがある。これは一体どういうことであろうか。

元々、英語には‘現在時制’と‘過去時制’しかなかった。人間は「現在自分がしていること」と「過去に自分がしたこと」にしか確信が持てなかったからである。しかし、時が経つにつれて、人間は視野も広くなり、想像力も豊かになる。そして、現在が過去とどのようにかかわり合っているか、あるいは未来とどのようにかかわっているかを想いめぐらすことができるようになる。考える動物である人間は、やがて、「現在」の時点にしながら、頭の中では、すなわち、主観的（＝心象的）には、「過去のこと」や「未来のこと」を自由に考え

ることができるようになる。人間がこのような状態に至った時、その表現も事実の範囲を超えていく。つまりそれは一種の感情表現（＝主観的・心象的表現）となる。Napoleon now leads ...の文は、その最も典型的な例で、客観的には「過去のこと」であるが、あたかも自分がその場に居合わせているかのように生々しく、すなわち主観的（＝心象的）に「現在のこと」として述べているのである。そして、これは動作・状態の区別なく、すべての動詞に用いられる。ただし、このような主観的・心象的現在時制の用法を無制限に許すと混乱が生じるため、言語現象として、その使用は自律的に制限される。主に次の3つの用法がある。

#### A. 歴史的現在 (Historical Present) として

上述の(1b)で詳述した。さらにこの発展として、劇的現在 (Dramatic Present) としても用いられる。これはAの発展形である。歴史上の過去の事実ではなくとも、何らかの形で現実の時間の現在ではないことを明示して用いられる。

He (=Hamlet) **took** me by the wrist and **held** me hard; Then *goes* he to the length of his arm; And, with his other hand thus o'er his brow, He *falls* to such perusal of my face As he would draw it. —Shakespeare; Hamlet.

(ハムレット様は私の手頸を取って、私をしっかりと引き留めました。それから腕をずっと伸ばしたところまでさがって、片手を額にかざし、私の顔をお描きになりたいかのようにしげしげとご覧になるのです。)

はじめに **took** と **held** という過去時制があることに注意。その後、**goes** と **falls** のように現在時制に変わっている。内容はもちろん全部過去の出来事である。このようなことは何も英語の場合に限ったことではなく、日本語の場合でもいくらかでも起こっている (cf. 岩垣 1980, p.34)。

次の引用は、岩垣 (1980) からは離れる。しかも、過去の出来事を描写するのに、過去時制と現在時制とがいわば恣意的に入り混じっているのである。筆者が最近読んだ桜木紫乃の『水平線』の中にある短編「夏の稜線」にある一節から見てみよう。

急いでTシャツと短パンに着替えさせ、チェックのボストンバッグを片手に持った。真由の手を引き階段を降りる。そろりと足を出すたびに、階段がきしんだ。一段一段、身がすくむような思いをしながら玄関までたどり着いた。こんな夜に限ってタキが起きてしまうのではないか。真由も京子の歩き方を真似て、つま先からそろそろと足を運んでいる。一也が戻るのは朝、牛舎仕事の直

前だ。今日は金を持って出たし、追り返される心配はないだろう。

京子は玄関の引き戸をそっと閉めた。居間の振り子時計が鳴り出した。十一時。真由を後部座席に寝かせて、タオルケットを掛ける。

タイヤが小石をはね飛ばし、車は静かに発進した。満月が牧草畑に青白い光を落としている。アスファルトに白線が浮かび上がる。何度も繰り返して見て覚えた天馬街道の地図を、頭の中でなぞり走る。峠をくり抜いた野塚トンネルに入る。山を抜ければ、海岸線は目の前だ。四キロを超える距離に不安を覚える頃、まばゆい電灯の終わりがきた。京子は再び夜に飛びだした。

—桜木紫乃 2012, p.120

ほぼ1ページそのままの引用であるが、文末の表現において、現在時制と過去時制がほぼ均等に配置されている。意味内容は過去の出来事を描写しているので、文字通り基本に従えば全部過去時制を用いるべきところであろうが、実際にはそうになってはいない。うまく、バランスよく、現在時制と過去時制を取り混ぜて表現しているのである。上述の英語の例で言えば、「歴史的現在」と同じ用法である（cf. ナポレオンのアルプス越えの説明とシェイクスピアのハムレットの例）。

もし全部が過去時制で表現されていたら、文学的に見てもとても単調な描写になってしまう。従って、過去の出来事を描写する場面においては、過去時制と共に現在時制を適度に織り交ぜているのである。そのようにした方が、いろいろな場面での描写が単調にならずにいきいきとしてくるのである。なお、その際における現在時制と過去時制の用いられ方に関しては、特に規則（ルール）といったものはなく、各個人がいわば恣意的に運用しているようである（小田島本有氏の御指摘による）。

このような場合においては、言語が異なっても、文学的な表現の仕方や発想（考え方）は同じであると言ってもよかろう。人間の主体的な意識の問題として捉え直してみると、大変興味深い。

#### B. 独立文・主節における未来形の代用として+時・条件の副詞節の中で

##### ①独立文・主節における未来形の代用として

『往来』『移動』『発着』『計画』『予定』『承諾』などの有意志動作動詞が未来の時を表す副詞（句）を伴う場合、未来形の代りに現在時制を用いることができる。

「私は明日成田を発ってロンドンに向かいます。」（*I leave Narita for London tomorrow.*）



「彼の乗った汽車は今日の午後三時に当地に着きます。」(His train *arrives* here at three this afternoon.)

「今夜また会いましょう。」(Tonight we meet again.)

「明日は私の誕生日です。」(**Tomorrow** is my birthday.) (この例は筆者の例)

「今週末には学校祭があります。」(We *have* a school festival **this weekend**.)

(この例は筆者の例)

これらの例は、客観的に見れば未来のことであっても、発言者にとっては確実な事柄で、心理的 (=心象的) には現在の事柄であり、しかも「未来の時を示す副詞 (句)」があるため、未来形を用いなくても普通の現在時制 (常習・反復動作など) と間違えることがないからである。逆に、内容的には未来のことであっても、「未来の時を示す副詞 (句)」がないと、現在時制は常習・反復動作のニュアンスを含んでしまう。

What time *do you start*? ([いつも] 何時に出発しますか。)

The ship *sails* on Wednesday. (船は [いつも] 水曜日に出帆する。)

例えば、明日誕生日がくることは確実なことであり、今週末に学校祭が開催されるのも行事予定表で決まっていることなので、確実なことである。しかも、心理的 (=心象的) には、その時の様子をありありと頭に思い描いているのであるから、現在時制がピッタリということになるのである (この部分の説明は筆者)。

それに対して、例えば

「明日は雨でしょう」[天気予報など] (Tomorrow it *will rain*.)

のように、人間の意志ではどうにもならない事柄 (無意志動作動作 rain に注意) の場合には、当然未来形を用いることになる (cf. 岩垣 1980, p.36)。

大変、詳細かつ明快でわかりやすい説明である。

## ②時・条件の副詞節の中で

一般には if ; when ; while ; before ; after ; till ; as soon as などの『条件』『時』を表す副詞節の中で未来形の代りに用いる現在時制の用法。これは①の発展したものである。例えば、①に属する文の

He *returns* next year.

(現在時制) ← (未来を示すもの)

と同じ関係が

I'll tell him when he *comes* back.

(未来を示すもの) → (現在時制)

においても成り立つのである。つまり、**next year** という未来を表す副詞があるから、強いて **will return** と未来形にしなくてもよいのと同じように、**I'll tell …** という未来形ですでに未来を表しているから、時の前後関係が明らかな「時・条件の副詞節」の中では強いて **will come** とする必要はないと考えられるのである。人間は非常に横着で、すぐに手間を省こうとするのである (cf. 岩垣 1980, pp.36-8)。

人間は確かに、後述することであるが、例えば現在完了形を使うべきところを過去時制で表現することがよくある。このようなケースなども、いわゆる省エネ表現の一つと言えるであろう。

とても明解かつ理にかなった説明で、特に心理的（＝心象的）な面において、“なぜ未来のことを述べるのに現在時制が使われるのか？”という疑問に対して説得力のある記述が展開されている。その上、人間には“**Simple is best.**”という心理あるいは **economy**（経済性の原理）という考え方が根底にあって、日常生活が営まれているようである。従って、別の言い方をすれば、上述のように、人間は非常に横着で、すぐに手間を省こうとするのであるという言い方になるのである。確かに以上のような論理での説明の仕方は、他のいくつかの著名な研究書においても見受けられ、一理あると思われる。しかし、この説明方法ではまだ不十分であり、もっと説得力のある説明方法があるというのが私見である。この点に関しては、後述する（ここでのユニークなコメントが、本論文での一番重要な主張、論点になる）。

③未来の時を示すものがなくても、内容的に未来のこととわかる副詞節の中で

上の②の発展形。時制が未来を表していなくても、内容的に、および動詞そのものが未来を指向、または意味している場合にも、この法則は適用される。例えば、

「汽車が止まるまで降りるな。」(Don't get off the train till it *stops*.)

「出掛ける前に君はそれをやってしまわなければならない。」

(You must finish it before you *go* out.)

などにおいて、主節 (Don't get off the train と You must finish it) の動詞は未来形ではないが、内容的には未来のことを述べているので、時の副詞節（＝従属節）(till it stops と before you go out) では現在時制を用いている (cf. 岩垣 1980, p.38)。

ここでの発展形の説明も、理にかなっており、説得力がある。

### C. 現在完了の代用として

say ; tell ; hear ; write ; read ; find ; forget ; come などと共によく用いられる。

「ジョーからそれを聞いた。」 (a. I *have heard* it from Joe.)

(b. I *hear* it from Joe.)

ここでは、b. のような言い方がポイント。これも‘主観的 (=心象的) 現在’の一つである。a. のような完了形の場合は、「ジョーから聞いて知っている。」の意であって、内容的には I know …と等しく、「聞いた」ことよりも「知っている」という現在の状態に重点があるからである。

類例は次の通り。

「彼は病気だ**そう**だ (=と聞いて知っている)。」 (I *hear* [=have heard] that he is ill.)

「彼が昨日演説したことを今日の新聞で**読**んだ (=読んで知っている)。」 (I *read* [=have read] in today's paper that he made a speech yesterday.)

「彼の名前を**忘**れた (=忘れてしまって思い出せない)。」 (I *forget* [=have forgotten] his name.)

「私は子供の時から彼を知っている。」 (I *know* [=have known] him from childhood.) →この例は特に興味深いので、後程詳述する。

「何故ここへ来たの (=何故ここにいるの)。」 (What *brings* you here?)

「わかった?」 (Do you *understand*?) (cf. 岩垣 1980, p.38)

### D. 応用例

#### ①「時・条件の副詞節における現在時制」の展開

「人間は非常に横着で、すぐ手間を省こうとするのである。」と書いたが、その横着ぶりを例文で示しておこう。

昔は、人称にかかわらず、

We must wait till he *shall* come.

と、客観未来の shall を用いていたのだが、いつの間にか shall が落ちて、

We must wait till he *come*.

と、仮定法現在 (Subjunctive Present) となり、やがて、

We must wait till he *comes*.

のように三人称単数には-s のつく直接法現在 (Indicative Present)、つまり、今日の用法となったのである。

また、この横着振りとはどまるところを知らず、最近では、「時・条件の副詞

節」以外の節でも、時制または内容によって「未来」が明らかであれば、未来形を用いずに現在時制で済ますようになってきている。例えば、

I hope you *like* it. (お気に召すとよいのですが。)

See that you *lock* the door before you go to bed. (寝る前に確かに戸に錠をおろして下さいよ。)

のように、hope, see が未来を指向しているため、後に続く名詞節の中では現在時制が用いられているし、また、

Won't they be surprised at some of the things they *find*? (彼らが見つかるもののうちにはきっと彼らがびっくりするようなものがあるだろう。)

の場合には、Won't …で未来が示されているため、形容詞節 ([which] they find) の中で現在時制が用いられている (cf. 岩垣 1980, p.39) (太字と下線部は筆者)。

確かに、筆者も I hope you like it. という英会話表現を覚えた際には、I hope you'll like it. のように、名詞節のところは未来形であったことをなつかしく思い出す。非常に興味深い指摘である。

## ②「現在完了の代用」の展開

「代用」とは言っても、現在では「代用」の域を出て、もはや確定した表現になってしまっている。従って、今度は逆に例えば I forget his name. = I have forgotten his name. ではなく、それぞれ伝える内容が異なっている。

次の各文を比較してみよう。

Where do you *come* from? (お国はどちら?)

Where *have* you *come* from? (どちらからいらっしゃいましたか?)

I *forget* his name. (名前を忘れた、ちょっと思い出せない。)

I *have forgotten* his name. (名前をすっかり忘れて、どうしても思い出せない。)

I *hear* that he is going to resign. (彼はやめるそうだ。)[単なる噂]

I *have heard* that he is going to resign. (彼はやめるとのことだ。)[確かな聞き込み]

(cf. 岩垣 1980, p.39) (太字と下線部は筆者)

## [コメント] (私見)

- Where do you come from? は、Where are you from? も可能。
- Where have you come from? は、Where did you come from? も可能。  
→現在完了が過去時制と同じ用法で用いられることがある (cf. ターニー

1988) ので、両方可能。

- I forget his name. は、忘れた結果の現在の（一時的な）状態ということなので、ちょっと思い出せないというニュアンスが出る。→例えば、He is sick.（彼は病気だ、具合が悪い。）というのも、彼の今現在の状態を言っているであって、例えば明日は調子がいいかもしれないのである。従って、一時的な状態、つまりちょっと思い出せないということになるのである。
- I have forgotten his name. は、忘れてしまった結果が現在まで影響して残っている（まさに現在完了の典型的な用法）ので、どうしても思い出せないということになるのであろう。
- I hear that he is going to resign. は、聞いた結果現在たまたま知っているという状態を表しているので、[単なる噂] ということになる。
- I have heard that he is going to resign. は、彼がやめるという情報を耳にした結果が現在まで影響を持っている（現在完了の典型的な用法）ので、[確かな聞き込み] ということになる。

つまり、これらのペアになっている例文においては、両者は決して同じ意味ではなく、それぞれ伝える内容が異なっているということである。このことは、「形が変れば意味が変わる」という認知言語学におけるモットーにも通じる考え方である。それから、最後の2つのペアーに注目したい。

I hear he is going to resign. (彼はやめるそうだ。) [単なる噂] と

I have heard that he is going to resign. (彼はやめるとのことだ。) [確かな聞き込み] のように、

絶妙に日本語を使い分けている。見事に [単なる噂] と [確かな聞き込み] の違いを表現している。

なお、ここでもまだ言及されてはいないが、「現在完了」で表現されていた言い方は、「過去時制」で表現することもできる。しかも、微妙な意味の違いはあるものの、特にアメリカ人においては双方がほぼ同じ意味で使用可能であるという主張を筆者はこれからしていきたい。なお、現在完了形の用法を過去時制および現在完了進行形との比較を中心に詳しく述べた論考として、伊関（2012, 2013）があるので、是非参照されたい。

以上、岩垣（1980）を中心に、現在時制と現在完了との「相互互換性」ということを詳細に見てきた。次節では、過去時制と現在完了および現在完了と現在進行形との「相互互換性」について考察していくことにする。

現在時制⇔過去時制⇔現在完了⇔現在完了進行形というように、それぞれに

「相互互換性」があることが分かれば、一見主観的（＝心象的）と思えるような表現も、一定の原理・原則（ルール）に基づいて運用されているということが理解できるようになり、ネイティブスピーカーの発想により近づくことができるであろう。このことは何も隣り合っている項目ごとに「相互互換性」があるということを意味するだけではなく、例えば現在時制⇔現在完了の間においても「相互互換性」が成り立っているということである。

なお、それぞれの「相互互換性」について説明する際には、例えば認知言語学や歴史言語学で得られた知見を活用するなど、学問的な成果を十分に活用することが重要なことは言うまでもないことである。

### 1. 3. 3 過去時制と現在完了の互換性

ターニー（1988）から少し引用してみよう。

「アメリカ人は現在完了を過去でいう

現在完了（過去にあった動作によって生まれた現在の状態を示したり、したことがある、と経験を表したり、文字通り完了したことを表したりするテンス）を、最近、アメリカ人はほとんど使わなくなった。

イギリス人が Have you eaten lunch yet?（ランチ、もうすませた？[まだだったら、]一緒に食べない？）というところを Did you eat lunch yet? とか Did you eat lunch? とか、過去形で聞いてくる。（中略）

アメリカ人の同僚の言語学者に言わせると、特にユダヤ系アメリカ人は、彼らの言葉イディッシュ語 Yiddish の影響からか、Did you eat lunch yet? と、yet（すでに、もう）をつければ完了だとわかるから、過去形だっていいじゃないか、となる。

なるほど、アメリカ人の手にかかると、英語が単純化されていくなあ、と感心する一方、耳障りでも、そんな英語が主流になるのか、少し危惧の念にかられる。

ーターニー 1988, pp.186-7

ネイティブスピーカーとしてのターニー氏のこのコメントは、大変重要な意味を持っている。筆者にとっては、このコメントに対しては、少なくとも次の4つの疑問点がある。

①（ランチ、もうすませた？[まだだったら、]一緒に食べない？）と言いたい時に、Have you eaten lunch yet? と言っても Did you eat lunch yet? と言っても意味に違いはないのかということ。認知言語学的に言えば、「形が変れば意味が変わる」というのが大原則であるから、100%意味が同じであるということ

はあり得ないことになる。上記の説明だと、そのわずかにでもありうる違いが全く分からない。今までの議論からも分かるように、確かに「言語における省エネ傾向」は一般的によく見られる傾向であって、決して無視することはできない。しかし、ただ **Simple is best.** という言葉一つで何でも片付けてしまっているものであろうか？非常に疑問である。今後この傾向がイギリス人（さらにその他の国の英語を母語として話している国民）にまで推し進められていったとしたら、将来的には「現在完了形」は衰退して消滅することになるかもしれないということになる。全く同じ意味で使われる文法形式が2つあったとしたら、1つは全く不要となるのであるから、**Simple is best.** の原則からすれば、現在完了形は要らなくなるのである。しかし、このターニーの本が出版されて26年が経過した今現在（2014年）の時点においても、現在完了形が衰退して滅びつつあるとか最近ほとんど聞かれなくなったという話は、少なくとも筆者には聞こえてこない。学校英語においても、重要な文法事項として現在完了形は相変わらず君臨しているように思われる。

②私見では、このターニーのコメントは、現在完了形の中の用法において、完了・結果・経験（研究者によっては、完了と結果をひとまとめにしていることもある）のケースに限られているということである。つまり、継続用法については全く触れられていないのである。おそらく、その用法では過去時制との相互交換性がないので、説明ができないものと思われる。

ついでに言えば、現在完了形用法については、次のように考えることも可能である。

(1)完了・結果・経験をひとまとめにして、「完了」とし、それに「継続」を加えた2用法とする考え方。

(2)そもそも現在完了形にいくつも用法があるわけではなく、完了・（結果）・経験・継続などの意味分類自体が不要であって、1用法でよいとする考え方。

筆者は、上記の(1)の立場を支持する。詳しくは、伊関（2012, 2013）を参照されたい。伝統的な考え方である4用法および3用法だけでなく、2用法あるいは1用法でよいという考え方もある。2用法を支持する立場は岩垣（1980）であり、1用法でよいとする立場は Bolinger（1977）である。

いずれにしても、「継続」の意味を表す場合には、現在完了形と過去時制との相互交換性はない、つまり同じ意味を表すものとして言い換えることはできないということである。

③ I lost my watch. vs. I have lost my watch. について

前者は「私は時計をなくしてしまった（が今はもう見つかっているかもしれないことを含意）。」ということであり、後者は「私は時計をなくしてしまった（のでいまここにはないことを含意）」ということである。このことは、英文法の学習者にとっては、極めて基礎的な了解事項であるはずである。しかし問題は、過去時制と現在完了形に相互互換性があるとすればどちらを使っても構わないということになり、この両者の区別ができなくなってしまうことになるのである。もし区別したければ、前者においては *I lost my watch but it is found now.* とか、後者においては *I have lost my watch and it is not found by now.* などと明示的に文を付け加えなければならなくなる。しかし、もしそのような操作をすれば、最初からこの両者の違いを認めていることになってしまい、これまた困るのである。このような矛盾点をいかにして克服していけばよいのであろうか。片方の文法形式（この場合は、現在完了形）をただ省エネのためになくしてもよいということにはならないということが分かるであろう。事実、まだ現在完了形はなくなっていないし、過去時制との明確なる相違点がある以上、存続すべきであるというのが私見である。

#### ④ *I arrived just now.* vs. *I have just arrived.* について

前者は「私はたった今到着した」の意味であり、後者は「私はちょうど到着したところだ」の意味であるとする。もし過去時制と現在完了形が意味において違い（差）がないとするのであれば、相互互換性があるということになる。

確かに、「たった今到着した」も「今到着したところだ」も時間的には全然と言ってよいほど違いがないことが分かり、そのように考えれば相互互換性があるといえるかもしれない。しかし、このような過去時制の表現は、特別に限られた用法であり、その上、その場合においてもなおこの両者には違いがあると主張している研究者もいる（cf. 鈴木・安井 1994, pp.268-79）。

「形が変われば意味が変わる」ということが言語の本質であると考えれば、この主張は正しいということになる。

事実、次のような例においては、現在完了形と過去時制との間には語用論上の違いがはっきりと見て取れる。つまり、含意（implication）の違いが見られるということである。

#### (1) a. *Have you had a good time?*

（いかがでしたか。楽しんでいただけましたか）

#### b. *Did you have a good time?*

（この間は、楽しんでいただけましたか）



—Close 1975, p.252

(2) a. Where have you put my purse?

(あなたは私のがま口をどこに置いておいてくれたのですか)

b. Where did you put my purse?

(あなたは私のがま口をどこに置いたのですか)

(3) a. Have you seen the Japanese Art Exhibition?

(今やっている日本美術展はご覧になりましたか)

b. Did you see the Japanese Art Exhibition?

(この間の日本美術展はご覧になりましたか)

—Quirk *et al.* 1985, pp.192-3

(1a) はパーティーが終った時に言う表現であるのに対して、(1b) は別の日に用いる表現である。

(2a) は現在のがま口のありかを尋ねているのに対して、(2b) は過去の行動について尋ねている。

(3a) は日本美術展は現在開催中であるのに対して、(3b) は日本美術展の開催はすでに終了してよい (cf. 鈴木・安井 1994, pp.273-4)。

会話の含意がこのように違っている以上、ターニー (1988) において述べられているような相互互換性というのは「特別な例外的用法」であると考えた方がよいかもしれない。「例外のない規則はない」(There is no rule but has some exceptions.) ということを見ると、ターニーが述べているようなこともあり得ないではない。要するに、意味論的に見て、何が中心的 (core) であり、何が周辺の (peripheral) かという問題である。

この点に関しては、もっとたくさんの用例を収集して検討しないと確かなことは言えない。今後の課題としたい。

なお、鈴木・安井 (1994, pp.275-7) においては、現在完了形と過去時制との用法上の違いについて、談話のレベルからの考察もしている。非常に興味深い考察であるので、是非参照されたい。

要するに、伝統的な分類法も考慮に入れて考えるとすれば、現在完了形の用法のうちの継続を除いた完了・(結果)・(経験) の用法において、過去時制と相互互換性があるものとないものの区別立てをどのように行うべきかを追究することが重要であるということになる。私見では、完了の意味を表す場合に、一番過去形との相互互換性があるように思われるが、詳細は不明である。

それから、鈴木・安井 (1994) は、認知言語学上の研究成果に基づいた説明

を行っているわけではないことに注意をする必要がある。それでも鈴木・安井（1994）は、動詞全般に関して、統語的および意味的な側面からいろいろな考察を行っており、大変有益である。現時点（2014年）で出版から早20年が経過しているが、その重要性はいささかも減じてはいない。

### 1. 3. 4 現在時制および現在進行形と現在完了形との互換性（G 3とG 4を用いての比較）

1. 3. 1 安藤（1996）の説明の項で、G 4の説明を引用しておいた。つまり、I hear という形式を使う場合は、I (have) heard も使用可能であるということであった。また、岩垣（1980）を引用しながら、現在時制が現在完了形の代用として使われる場合を詳しく見てきた。それと、ターニー（1988）の主張（アメリカ人は現在完了を過去でいう）を合わせれば、必然的に I hear = I have heard = I heard という図式が導かれることになる。

前節では、鈴木・安井（1994）も引用しながら、過去時制と現在完了形に相互互換性があるところと、用法に違いがあるところの両面を見てきた。もちろん、相互互換性があるところに焦点を当てて考えてみれば、I hear = I have heard = I heard の図式にも十分応用できるはずである。

ここでG 3およびG 4の用例と説明を引用してみることにしよう（一部、前述の引用と重複）。

#### ◎（G 3の記述）の1

I hear you're going to Egypt soon. 近々エジプトに行かれるそうですね《◆  
(1)過去に聞いた情報が今も有効な時は現在形 hear を用いるが I (have)  
heard ...も可。(2) Have you heard [ Did you hear ] that ...? はニュースやう  
わさ話を切り出す表現としてしばしば用いられる》

—小西・南出（編）2001, p.871

#### ◎（G 4の記述）の1

I hear you're going to Egypt soon. 近々エジプトに行かれるそうですね《◆  
(1)過去に聞いた情報が今も有効な時は現在形 hear を用いるが I (have)  
heard ...も可。》

—小西・南出（編）2006, p.919

#### 〔コメント〕

大変興味深いことに、G 4においては、G 3でなされていた(2)の部分の説明がそっくり欠落している（削除されている）。これはなぜであろうか？この部分の説明が不適切であるとは、筆者には思われない。私見では、Have you heard

[ Did you hear ] that ...? が最近あまり用いられなくなったとか、両者の間の相互交換性がなくなったとかの話も聞いたことがない。詳細は不明である。

さらに、G 3 と G 4 の比較を続けることにする。

### ◎ (G 3 の記述) の 2

since conj. 1 a …して以来、…してから (今 [その時] まで) 《◆since 節を伴う文の主節では、過去の一定時から話題の時 (今 [その時] まで継続したこと、あるいはその間に経験してきたことを述べる；従って、主節は完了時制を用いるのが原則であるが、他の時制が用いられることもある》 || He has worked [ has been working ] since he left school. 彼は学校を出て以来働いている／**We have known each other ( ever ) since we were children.** 私たちは子供の頃からお互いによく知っている《◆ever は since の意味を強める》／**I feel shaky since I was sick.** 病気になってから体が震えるのを感じる《◆過去の一定時から続いていても現在の状況や状態を述べる時は現在形が用いられることもある》。b [ it is C ~ ... ] …してから…になる《◆(1) C は期間を表す語。(2)通例主節は現在形で、since 節は過去形。(3) since 節は否定形不可》 || It is [ has been ] two years since I saw Tom last. 2年トムと会っていない。《◆(1) 《米》では **has been** が普通。(2)同じ意味の現在完了文 I have not seen Tom for two years. の混同から It is two years since I have seen Tom. のように since 節に完了時制を使うことがある。》(一部、筆者なりの記述に改めている)

—小西・南出(編)2001, p.1741

### ◎ (G 4 の記述) の 2

since conj. 1 a …して以来、…してから (今 [その時] まで) (中略) || He has worked [ has been working ] since he left school. 彼は学校を出て以来働いている／**Ever since we were children, we have known each other.** 私たちは子供の頃からずっとよく知っている《◆ever は since の意味を強める》／**I feel shaky since I was sick.** 病気になってから体がふらふらする／**We are eating more meat since we moved here.** ここに引っ越してきてからは肉をたくさん食べるようになってきている《◆前2例のように、過去の一定時から続いていても現在の状況や状態・変化を述べる時は現在形・現在進行形が用いられることもある》。b [ it is C ~ ... ] …してから C になる《◆(1) C は期間を表す語。(2)通例主節は現在形で、since 節は過去形。(3) since 節は否定形不可》 || **It is [ has been ] two years since I last saw Tom. = Two years have passed since I last saw Tom.** 私は2年間トムと会っていない《◆(1)第1文では《米》では has

been が普通。(2) I haven't seen Tom for two years. との混同から It is two years since I have seen Tom. のように since 節に完了時制を使うことがある。》(一部、筆者なりの記述に改めている)

—小西・南出(編)2006, pp.1782-3

### [コメント]

この引用部分の G 3 と G 4 の比較も大変興味深い。

・ G 3 では「私たちは子供の頃からお互いによく知っている」という日本語訳、G 4 では「私たちは子供の頃からずっとお互いによく知っている」という日本語訳になっている。G 3 では ever が (ever) のように括弧書きになっている。また、G 3 と G 4 では、since 節と主節の語順が逆になっている。その辺の違いが微妙な訳語の違いに反映されているのであろう。G 4 に「ずっと」という訳語が追加されている。両者の違いは、談話の中で検討すると面白い。

・ I feel shaky since I was sick. という例文に対する日本語が、G 3 と G 4 とで異なっており、注目される。G 3 では、「病気になってから体が震えるのを感じる」となっており、G 4 では「病気になってから体がふらふらする」となっている。どちらの日本語訳の方がより適切であろうか？わざわざ日本語訳を変えたのには、それなりの理由があるはずであるが不明である。shaky という形容詞を G 3 および G 4 で見てみると、ほぼ同じ記述である (G 4 の説明の方が、多少詳しくなっている)。この場合に関連する意味としては、＜声・からだなどが＞震える (trembling)、よろよろする || a shaky hand [ voice ] 震える手 [ 声 ] となっており、全く同じ内容である。ちなみに、ロングマン現代英英辞典・第 3 版 (1995, p.1305) を紐解いてみると、該当部分には次のような記述がある。shaky adj. weak and unsteady because of old age, illness or shock: *shaky voice* | **be shaky on your feet** ( =not able to walk very well ) *Grandad was a little shaky on his feet after the accident.*

つまり、because of 以下の理由が shock によるものであれば「体が震えるのを感じる」という日本語の方が適切であり、because of 以下の理由が old age or illness であれば「体がふらふらする」の方が適切であろうと思われる。ただし、風邪等により悪寒がするという状況であれば、「体が震えるのを感じる」と訳しても決しておかしくはない。要するに、意味においてどの側面を強調するかで訳語が変わってくるのであり、G 3 と G 4 のどちらが適切か一概には言えない。ただし、I feel shaky since I was sick. という英文に対する日本語訳としては、「病気になってから体がふらふらする」という訳語の方が適用範囲が広いので、

より適していると言えるかもしれない。おそらく、そのような考え方に立って、G 3 から G 4 で日本語訳を変えたのではなかろうか。

・通例主節は現在形で、since 節は過去形。It is [ has been ] two years since I saw Tom last. という文において、since 節は過去形になっており、説明通りである。問題は since 節の過去形 (saw) の部分が、《米》では has been が普通であるという箇所である。これでは、アメリカ人は現在完了形を用いるべきところを過去時制で言うという主張とは相容れないことになる。

・G 3 では I feel shaky since I was sick. という例文だけであったものが、G 4 ではこの例文に加えて We are eating more meat since we moved here. という例文が 1 つ追加されている。それに伴って、過去の一定時から続いていても現在の状況や状態・変化を述べる時は現在形・現在進行形が用いられることもあるという記述に変っている（下線部が追加されているのである）。学校英文法に則って考えれば、We are eating ～の部分は、We have been eating ～と現在完了進行形の形を用いるのが正式であろうが、この例のように現在進行形で言うことも可能であるということである。つまり、この場合両者に相互互換性があり、ほぼ同じ意味で用いられるということである。しかし、それでもなお多少の違いは存在しており、鈴木・安井（1994, p.254）に興味深い説明がある。進行相（現在進行形）の文と完了進行相（現在完了進行形）の文とはほぼ同じ意味であるされるが、後者の文よりも前者の文の方が、行為が未来にも続いていくという感じが含意されるようである。この点に関する相互互換性に関しても、次の例と同様、十分な考察が必要である。

さらに、次のようなことも言える。例えば、I have studied English for five years. と I have been studying English for five years. という 2 つの文においては、理論上は確かに両者の違いを説明することは可能である。前者は「完結」後者は「未完結」を含意する。従って、前者では現時点よりも先に英語の勉強をするという含意は必ずしも含まれてはならず、やめてしまっても構わないわけであるが、後者ではこれから先も継続して英語を勉強していくという含意があるということである。ただし、この違いは微妙なものであるらしく、両者はほとんど変わらないと言っているネイティブ・スピーカーもいる。もしそのことが事実であれば、その時の気分によってどちらを使っても差支えないということになる。もちろん、両者の意味が限りなく近くなると言っても、全く同じ意味になるということではない。このような相互互換性に関しては、今後慎重な検討を要する（cf. 伊関 2012, 2013）。

## 1. 3. 5 過去時制と現在完了形との互換性 (G 3 および G 4 の記述)

## ◎ (G 3 および G 4 の記述) の 1

G 3 と G 4 の記述が事実上同じなので、ここでは G 4 の記述 1 つに統一して示しておくことにする。

since prep. …以来、…から (今 [その時] まで) || I have known him since two years ago. 2 年前から彼を知っている《◆これは《非標準》なので I have known him for two years. とするべきと言う人もいるが、一般に使われている》

—小西・南出 (編) 2006, p.1782

## [コメント]

この部分も大変興味深い引用である。筆者が中学生の頃から、**since two years ago** のような言い方は誤りで、**for two years** のように言わなければならないと教わってきた。しかし、詳細はもう少し複雑で、例えば安田 (1970, p.217) には、次のような説明がある。

「since three days ago は使えるか？」

「彼は 3 日前から病気をしています」

(a) He has been sick for three days.

(b) He has been sick these three days.

(c) He has been sick \*since three days ago.

(c) の文のように **since three days ago** を使うことは誤りではありませんが、正しい用法とは言えません。このような場合は (a) の文が正しい言い方です。ただし、次のような場合は [**since ..... ago**] が使えます。

(例) I have known him since I met him three years ago.

(私は、三年前に会った時から彼を知っています)

さらに、次のような説明も前ページに見られる。

「継続」を表す現在完了と **for ~ / since ~** の使い方。

[**for ~**] は継続している「期間」を表し、[**since ~**] は継続のはじまる「起点」を表します。

(例) He has been sick for two days. (二日間／二日前から)

He has been sick *since the day before yesterday*. (おとといから)

[注意] 普通の現在完了は、過去の時を表す副詞とは一緒に使えませんが、「継続」の場合は [**since + 過去の時**] の形で使えます (一部、筆者なりの記述に改めている)。

—安田 1970, pp.216-7

安田（1970）は出版されてから現時点（2014）で 44 年が経過している（もう少しで 50 年＝半世紀になる）が、今も色褪せることなく有益な本である。この本のタイトルが『NHK 続基礎英語 英語の文型と文法』となっているので、元々は中学校 2 年生向きに書かれた本であるが、筆者にとっては今なお利用価値の高い優れた参考書である。

安田（1970）における上述の *since* に対するコメントは次の通りである。

・（c）の文を誤りではないが、正しい用法ではないと定義しているところはよい。ただし、次のような場合は [*since ..... ago*] が使えるとしていること。

**I have known him since I met him three years ago.**

この用法が OKなのは、上述の説明でいうところの継続のはじまる「起点」を表しているからであろう。

・ただし、*He has been sick \*since three days ago.* に非文の印である\*を *since* の句につけているにもかかわらず、*He has been sick since the day before yesterday.* は OKであるとしていること。この *since* 句は、継続のはじまる「起点」を表しているので OKであるという論法であるが、それならば *since three days ago* も OKであるはずである。さらに、[注意] として、普通の現在完了は、過去の時を表す副詞とは一緒に使えないが、「継続」の場合は [*since+過去の時*] で使えるとある。もしそうであれば、*\*since three days ago* に asterisk (\*) を付けるべきではない。従って、この部分の説明は矛盾しているということになる。

・私見では、継続のはじまる「起点」を表す句および節 (*since* 句と *since* 節) に対して、使用法上の区別立てをする必要があるかもしれないということである。*since* 句 (*since three days ago* や *since the day before yesterday*) における *since* は前置詞であるのに対して、*since I met him three years ago* の *since* は接続詞であるということ。後者の方が継続のはじまる「起点」という意味内容がはっきりと文の中に現れているということが言えよう。そのような場合の現在完了の「継続」は、[*since+過去の時*] という形で十分問題なく使えるといった方がより正確であると思われる。

いずれにせよ、上記のような問題提起をしている安田（1970）は大変興味深い本であると言えよう。

・従って、*I have known him since two years ago.* は《非標準》なので、*I have known him for two years.* とするべきであると言う人があるが、実際には一般に使われているという G 3 および G 4 の主張は、ある意味正しいと言える。

### ◎ (G 3 および G 4 の記述) の 2

ここでは、just の項目についての記述を見ていく。G 3 と G 4 の記述が事実上同じなので、ここでも G 4 の記述 1 つに統一してしめしておくことにする。

「just adv. [完了形・過去形と共に ; be 動詞の後、一般動詞の前で] ちょうど今 (・・・したばかり)、つい今しがた ; [ be doing と共に] 今にも、ちょうど、じきに || She ( has ) just left the office. 彼女は今しがた会社を出たところ (= She left the office just now.) / She's just going [ off, about ] to cook supper. 彼女は今夕食の仕度にかかろうとしている。

〔語法〕(1)完了形と共に用いるのが正式であるが、《米略式》では過去形で用いられることも多く、《英略式》でも次第に過去形と共に用いられるようになってきた。(2) just と過去形の併用では過去の時点を示す副詞も使用される : I just saw Jane last night. 昨夜ジェーンに会ったばかりだ。(3)完了形では疑問文も可。特に《米略式》では過去形でも疑問文は可。(4)否定文では普通用いない。」

—小西・南出(編)2006, p.1070

#### 〔コメント〕

・大変有益な記述である。例文を見ると分かる通り、just が過去時制と現在完了形のどちらとも一緒に用いられており、相互互換性があることが主張されている。

・語法欄では、語法上の注目すべき点が4つほど盛り込まれており、大変興味深い。《英略式》でも次第に過去形と共に用いられるようになってきたという説明は有益。+just と過去形の併用では過去の時点を示す副詞も使用される : I just saw Jane last night. など利用しやすい例文である。

・(3)と(4)も有益な情報である。例文がないのが、大変残念である。

### ◎ (G 3 と G 4 の 2 つを利用して得られた知見)

要点を一言で言えば、ことばというのは規則 (ルール) で 100% 定義するわけにはいかないということである。このことは、言語学という学問分野からのアプローチでは至極当然の帰結である。従って、ルールというものは、十中八九適用できれば、相当有効な規則であると考えても差支えないと筆者は考えるものである。しかし、逆に言えば、十中一二は規則が適用できない (当てはまらない) ケースがあるということになる。この確率に対して、信憑性があると思うかあるいはないと思うかで、得られるべき結論も変わってくる可能性がある。しかも、たとえ用法上の基準というのが備わっているようなケースでも、ことば (表現) ごとに使用上揺れがあり、しかも各項目ごとに足並みは必ずし



もそろってはいないということである。さらに言えば、「相互互換性」があるような2つ以上の表現形式がどの程度の意味上の類似性を有しているのかなど、今後解決しなければならない問題が山積していることが分かったのである。

なお、今回はG 3とG 4をデータベースに用いて、いろいろと有益な考察を行った。焦点を当てた項目は異なっているが、ジーニアス英和辞典だけではなく、さまざまなレベルの英和辞典を用いた考察が伊関(2014)でなされている。

英語教育の観点からすれば、いわゆる「辞書指導」をする上でも有益な情報がいくつかあるものと思われる。研究と教育のインターフェイス(接点)の探究ということにも重点を置いて記述しているので、是非参照されたい。

## 2. 大学用の英語テキストからの具体例の1 (物理的な時間と心理的な時間のずれ)

宍戸・Nordyke(2009)では、Lesson 1 (Parties パーティー)において、英文日記の形式を用いて Reading の演習を行っている。今回は、その Lesson 中での Reading という部分を取り上げて、考察をしていく。

その部分の英文を、そのまま引用することにする。

「*What kind of parties do you have in your country?* (your にある強勢符号は筆者がつけたもの。この部分に文強勢がきていたからである。)

Dear Diary,

Next semester, I'll finally **be** a college student! Today **was** my last ever day at high school. Just as I'd **hoped**, tonight **was** the best night of my life. But it's **been** really stressful for my best friend, Tammy. She didn't have a date and was really depressed. I felt so bad for her, but then yesterday, a guy called Gerald asked her to go with him.

I went with my boyfriend, Jordan. I wanted to look my best, so I spent all afternoon getting ready. I wore a pretty long blue dress that Mom and Dad had brought me especially for the big night. Mom helped me do my hair and nails. When I was finally ready, I couldn't believe my own appearance! At 6:30 p.m., Jordan came to pick me up. He looked so handsome in his tuxedo. He gave me a corsage; a tiny bunch of flowers that each boy gives his date on this special night. I pinned the corsage to my dress and we left.

When we walked into the school gym, I was amazed! The place looked wonderful. The ceiling and walls were covered with white lights and pink

balloons. There was a DJ playing pop music, and tables were full of food and drinks. All our friends were already there, wearing their special clothes. Everyone spent the night eating, drinking, talking, and dancing. I had such a good time. Best of all, Jordan and I danced together to every slow song. It was romantic. Well, diary, I'm tired now after such a great evening. Good night! (太字は筆者)

— 宍戸・Nordyke 2009, p.2

(266 words)

当然のことながら、この英文日記の大部分は過去時制で書かれている。日記を書いた人が、今日一日を振り返って「ああいうことがあった」「こういうことがあった」と思い出しながらつけているのである。

出だしの *Next semester, I'll finally be a college student!* 「来学期、私はとうとう大学生になります。」は未来のことなので、原則通り未来形が使われている。

それと、最後の部分の *Well, diary, I'm tired now after such a great evening.* 「さて、日記。私はとても素敵な夜の後で今疲れました。」のところは、「今疲れました」(結果)と一見過去時制のような日本語表現になっているが、「今疲れている」(状態)というのと意味的には等価であるので、現在時制となっている。これも分かりやすい。

*Just as I'd hoped, ~.* 「期待した通り、」は過去のある時点までずっと期待していたということなので、この例文のように、過去完了形が用いられているのも原則通りなので納得がいく。

*But it's been really stressful for my best friend, Tammy.* 「でも、友達のタミーにとっては本当に苦痛でした。」という部分では、残りの部分がほとんど全部過去時制であるのに対して、タミーにとっては今も *stressful* な状態(気持)が残っている(色濃く影響を及ぼしている)のが分かるので、過去時制に代ってここでは現在完了形を選択しているものと思われる。相互互換性の原則からすれば、この部分も過去時制を用いて表現しても構わないわけであるが、過去時制の多用を避けるために意図的に現在完了を使用したとも考えられる。いずれにせよ、十分に納得がいく表現である。

一番の問題は、最初から2番目と3番目の文である。Today was my last ever day at high school. と *Just as I'd hoped, tonight was the best night of my life.* という2つの文の太字と下線部になっている *was* という過去時制の表現であ

る。この表現以下の部分の過去時制の表現はすべて、「今日は、こういうことがあった、こういうことがあった」と次々に思い出しながら記述しているのであるから、一番基本に忠実な言い方をしているので、特筆するには及ばないのである。では上例の2文は、どこが興味深いのであろうか？まず、[教授用資料]を使って、その部分の日本語訳を見てみよう。「今日は私の高校での最後の日です。」「期待した通り、今晚は私の人生で最高の夜です。」となっている。

要点は、英語では過去時制の **was** が使われているところに、日本語では「です」というように現在時制となっており、大変興味深い。

このことを、どのように考えればよいのであろうか？私見では、次のようである。英文の日記においては、**today** も **tonight** も物理的な時間としてはまだ現在ではあるが、心理的にはもう過去のことになってしまっている、「今日」や「今夜」のような語があっても過去時制を用いているのである。例えば、夜の11時半頃（つまり、正確に言えば一日はまだ終わっていない→30分くらい残っている）に、今日一日にあった出来事を思い出しながら日記をつけている姿を頭に思い描くことができるのである。つまり、物理的な時間（現在）と心理的な時間（過去）とのずれが生じているのである。

英語 物理的な時間（現在）＋心理的な時間（過去）＝**was**（過去時制）

日本語 物理的な時間（現在）＋心理的な時間（現在）＝「**です**」（現在時制）  
 という図式が成り立つことになる。日本語においては物理的な時間と心理的な時間との間にずれが生じていないのに対して、英語においては両者の間にずれが生じているところが興味深い。もちろん、「今日は私の高校での最後の日でした。」「期待した通り、今晚は私の人生で最高の夜でした。」のように、現在時制を過去時制に転換することももちろん可能であり、日本語としてどちらも自然である。要するに、日記をつけている人の心理的な時間に対応して「です」と「でした」を使い分ければよいということになろう。

このことは何も日記のような書かれた文章に限らず、例えばテレビドラマのような話し言葉を用いた場面においてもよく見受けられる。自分の子供を失った親が「この子はこうだ、～だ。」などと語る場面がそうである。現実的にはもう故人であるので、普通「この子は～だった」と過去時制を用いて語るべきところである。しかし、この親にとっては、自分の子供は現在も心の中でははっきりと鮮明に生きているので（現実的にはもう亡くなっているということのを認めたくない）、敢えて現在時制を用いて語っているのである。この母親は、死んだ自分の息子のことを語る時にはいつも現在形なのである。「この

子はバラの花が好きなの。」などというセリフがテレビ画面から聞こえてきた。死んだ息子のことが忘れられていない（現実を受け入れられていない）ことは明らかである。この例なども、現実の時間と心的な時間のずれを示している好例である。

### 3. 大学用の英語テキストからの具体例の2（物理的な時間と心理的な時間のずれ）

近年、大学での英語教育の目玉となっている、TOEIC 対策用の英語教材からの引用である。『いま始めよう TOEIC テスト (Step-up Skills for the TOEIC Test)』は、実際の TOEIC 試験に対応したさまざまな問題を掲載しており、大変有益である。また、Useful Expression や Grammar も重点的に取り上げており、利用価値が高い本である。その中から1箇所、興味深い説明のあるところを引用することにする。

「[Grammar] (Warm-up)

#### ■動詞の時制(2)■

(例題) I will stay home if it tomorrow.

(A) rain (B) rains (C) will rain (D) will be raining

(解答) (B) rains (訳：明日雨が降れば、家にいます。)

この文は、「明日雨が降れば」とこれから先のことを言っていますが、when や if などの「時」や「条件」を表す接続詞を使うと、それに続く節の動詞は**現在形**になります。どうなるのか予想しているのではなく、「実際にあること」と考えて話をしているので、現在形で表します。

ただし、when 節や if 節の動詞が現在形になるのは、その節が副詞の働きをしている場合のみという点に注意して下さい。“I wonder if it will rain tomorrow.” (明日雨が降るかなあ。) の場合は、if 節は wonder の目的語で「～かどうか」という意味を表しており、名詞の働きをしていますので、if 節の中の動詞も未来を表す will が用いられます。

#### Part 5 Incomplete Sentences

A word or phrase is missing in each of the sentences. Select the best answer to complete the sentences.

13. After she \_\_\_\_\_ school this semester, she will travel the world and write a book.

(A) will have finished (B) will finish

(C) finishes

(D) finish

(解答) (C)

14. It \_\_\_\_\_ a long time since I saw him last.

(A) was

(B) has been

(C) will be

(D) were

(解答) (B) (一部、筆者なりの記述に改めている)

ー北尾・西田・林・Covert 2010, p.21

# [コメント]

・上記の説明の中では、「時・条件を表す副詞節」の中では、これから先のこと（未来のこと）を述べている場合でも現在時制を用いるという主旨のことに続く部分が重要である。どうなるのか予想しているのではなく、「実際にあること」と考えて話をしているので、現在形で表すという説明である。この部分は大変簡潔な説明になっているが、とても重要な考え方が内包されているのである。つまり、たとえ物理的な時間は未来であっても、心的時間はあくまでも現在だということである。「実際にあること」と考えて話をしているというのは、換言すれば、心の中では現在のこととして考え、ことばとして処理をしているということを意味しているに他ならないのである。今までの筆者の説明の仕方と軌を一にしているのが分かる。さらに、伝統的にいくつかの研究書（参考書）等で言われているような、「主節で未来形が使われていれば、従属節ではわざわざ未来形を使わなくても現在時制で代用することができる」というような「省エネ説」に基づいた説明とは、異なったアプローチであると言うことができよう。この2つのアプローチの仕方についてのコメントは、後述することにする。

いずれにせよ、ここでの説明は、大変短いながらも筆者にとっては大変説得力のあるものとなっている。

・上記の説明中の後半部分は、伝統的な考え方に従った説明になっており、特に目新しいものではない。従来の説明のほとんどが、これと同じであるからである。つまり、副詞節ではなく名詞節であれば、従属節中は現在時制ではなく未来形を用いるというものである。しかし、岩垣（1980）でも述べているように、例えば次のような例では、未来形でも現在時制でもよいということが分かっているのである。I hope you'll like it. vs. I hope you like it. が英会話でもよく用いられる文であり、好例である。この点にまで説明が及んでいれば、理想的である。逆に言えば、その点にまでは言及されていないのが筆者にとっては残念なところである。今回は言及できなかったが、「視点の移動」ということ

に焦点を置いて有益な説明をしているものに中川 (1996, pp.156-7) があるので参照されたい。私見では、考え方に違いがあるものの、筆者や岩垣と方向性は同じであると思われる。

#### 4. 結論と今後の課題

##### 4. 1 結論

「時・条件を表す副詞節」の中では、未来形を使わないで現在時制を用いるという原則についての説明の仕方には、大きく分けて2通りがあった。

①主節が未来形で表現されていれば、従属節まで未来形を用いなくても現在時制で十分に済ませることができるという説。[省エネ説]

②内容がたとえ未来のことであっても、心の中では現在のこととしてイメージされていれば、ことばの上では現在時制を用いて表現することができるという説 [物理的な時間と心理的な時間とのあいだにはずれがあるという説] →短く言うと、[ミスマッチ説]。

ここからが、重要な結論である。上記の2つの説とも、ある言語事実を説明するにあたっては、1つの有力な説であることには違いない。ただし、両者の間には、その性質上重要な違いがあることも事実である。

つまり、同じくらい（同程度に）説明能力があるというわけではないということである。今まで見てきたような例文についての説明をする際において、[省エネ説]と[ミスマッチ説]の両方が関係してくる場合において考えてみよう。

それはあくまでも[ミスマッチ説]で主張されているような事実（心理）があってはじめて、[省エネ説]を実施した（行った）ということである。要するに、この2つの説の適用順序に関しては、[ミスマッチ説] → [省エネ説]ということであって、その逆ではないということである。また、[省エネ説]だけでは根拠が弱いということもあり、[省エネ説]に[ミスマッチ説]が加わってはじめて合理的な説明ができると筆者は結論づける。

従って、はじめに「省エネ説」ありきでは、困ってしまうような例を考えることが必要になってくる。

具体的な例を挙げて見てみよう。

岩垣 (1980, p.39) に基づきながら説明する。

「◎『条件の』副詞節中の will

will が単なる未来指標としてではなく (その場合は、現在時制を用いるの

が原則)、主語の意志や、丁寧な依頼を表している場合は、‘未来形’として用いられているわけではないので、条件の副詞節の中に用いることができる。

If you *will* do so, you will be called a fool.

(本気でそんなことをすると、君は馬鹿と呼ばれるぞ。)

If you *will* give it to me, I will be very happy.

(もし本当にそれを私にくれる気なら、大変嬉しいものです。)

(太字と下線部は筆者。一部、筆者なりの記述に改めている。)

－岩垣 1980, p.39

つまり、単なる未来指標（当該の時制が未来であるということを表しているだけであるということ）の時には、実際にあること（現実にあること＝現在のこと）として頭の中で想定して話を進めることになるので、たとえ内容が未来のこと（これからのこと）であっても、ことばとして使用する際には現在時制を用いることになるのである。つまり、「物理的時間と心理的時間のずれ」が起こっているものとして説明可能なのである。

それに対して、上記の例におけるように、「主語の意志や丁寧な依頼を表している場合は、‘未来形’として用いられているわけではないので、条件の副詞節の中に用いることができる」という説明の仕方をしている。

つまり、まず「ミスマッチ説」のフィルターを通して、それに通過したものがはじめて「省エネ説」のフィルターを通過することができるという仮説を立てればよいということになる。換言すれば、最初のフィルターを通過することができなかった副詞節はそのまま未来形で表現され、最初のフィルターを通過した副詞節は「省エネ説」のフィルターに向かい、そこで動詞が未来形から現在時制に転換されて、現実使用される文となるということである。

図式で表すと、次のようになる。

◎「時・条件を表す副詞節」→「ミスマッチ説」というフィルターを通過→  
「動詞が未来形から現在時制へと転換」。

◎「時・条件を表す副詞節」→「ミスマッチ説」というフィルターを通過で  
きない→×（ブロック）「動詞は未来形のまま」。

すなわち、最初から、「時・条件を表す副詞節」においては未来形を用いずに現在時制を用いるという「省エネの原則」が何の状況も考慮に入れずに用いられるわけではないということである。その点においては、従来の研究書および参考書の記述の仕方は、とても misleading のものであると筆者は言わざるを得ないのである。

ここでは、2つのことが問題となる。

①「主語の意志や丁寧な依頼を表している場合は、‘未来形’として用いられているわけではない」という部分。If you will do so, (本気でそんなことをすると,) や If you will give it to me, (もし本当にそれを私にくれる気なら,) という部分の意味内容を考えてみれば分かるように、両文ともそのようなことをまだしているわけではない (つまり、内容としては未来のことである) ので、必然的に未来形が用いられると説明することが可能なわけである。それに対して、「時・条件を表す副詞節の中で現在時制が用いられる」という原則を用いる時には、話者の視点が未来から現在に移動してしまっているので、やはり必然的に未来のことでも現在時制を用いることになるのである。

以上のようなアプローチを経て説明を行っていけば、無理のない (苦しくない) 説明ができると筆者は考えている。少なくとも、「主語の意志や丁寧な依頼を表している場合は、‘未来形’として用いられているわけではない」という記述は不正確であるというのが私見である。

要するに、話者の視点が未来ならば‘未来形’、現在ならば‘現在時制’が用いられるということである。 実に simple である。

②「条件の副詞節の中に用いることができる」という部分。そのような言い方をすると、時を表す副詞節の中では用いることができるのかどうか曖昧で分からなくなるということである。筆者なりに1つ例文を考えてみると、次のようになる。When you will come to see me, please let me know. (君が私に会いに来ようとする (その) 時には、私に知らせてくれ。) のような文が可能であると思われる。実際この文は、If you will come to see me, please let me know. (もし君が私に会いに来ようとするなら、私に知らせてくれ。) と言っても意味に大差はない (かなり近いと言ってもよい) ので、結論としては「時」と「条件」のどちらの意味であっても副詞節中に用いることができるというのが私見である。 要するに、When 節は「時」を表す意味であり、If 節は「条件」を表す意味であると主張することは、もちろん間違いではないが、上述における説明からも明らかなように、少なくとも語用論上 (コミュニケーション上) では、両者は interchangeably に用いることが可能であると思われる。そのように考えないと、伝統的な文法上の説明として、先行研究における優れた研究者達が「時・条件を表す副詞節」というように「時」と「条件」をセットにして説明を試みてきた理由が希薄なものになってしまうからである。従って、筆者としては、「時」と「条件」とをワンセットにして考えるという立場を尊重して考察



していることがわかるであろう。

なお、主節と従属節の関係について、学校英文法の視点から考察した論考に伊関（2000, 2011）があるので、是非参照されたい。

#### 4. 2 今後の課題

この項では、次の2つの点について言及しておくことにする。

①今回は、「現実的な時間のずれ」と「心理的な時間のずれ」が、英語さらには日本語という言語の時制の選択にどの程度の影響力があるのかということを中心に考察してきた。それに加えて、ある表現形式を選択した時においても、別の表現形式との「相互互換性」ということにも力点を置いて説明を試みてきた。

「形が変れば意味が変わる」という認知言語学における基本的な考え方に基づきながらも、ほとんど意味に違いがない場合ということにも言及した。

今後は「相互互換性」ということをもっと前面に押し出して、実際の言語生活の中での生きた使い方ということにもっと重点を置いて考察を進めることが重要であろう。ただ単に、研究書（参考書）に書いてあったことの説を取り入れての自分自身による独自の仮説の設定とその証明ということも学問研究においては重要なことではあるが、「現実的な言語使用」という側面を軽視したのでは「机上の空論」になってしまう恐れがあるということである。

そのようなことを考えてくると、今回本稿で行ったようなG3とG4からの例文や説明および記述を参考にしたアプローチの仕方は大変有効であったと筆者は思っている。G3およびG4の語法欄などを見ると、ことばの使用法（語法）に関する揺れが見られて大変興味深い（例えば、シェイクスピアの文法〔語法〕などは、現代英語との間に揺れが見られるとよく言われる）。

また、「例外のない規則はない」とよく言われるが、十中八九規則が適用できれば、その規則は有効であると考えてよいと思われる。

それから、G3（2001）とG4（2006）の語法上の説明の仕方に違いが見られたことも興味深いことであった。両者の間には、5年という歳月が流れているので、内容および記述の仕方が変わっていても別に不思議なことではない。もちろん、年月の経過により語法上の違いが現れたということも考えられるが、語法上確立しているとは言えない（つまり、揺れがある）と考える方が妥当であるというのが私見である。もっと他にもさまざまな辞典にあたってみることが大切である。

②「言語における省エネ現象」というのは、別の言い方をすれば、**Simple is best.** だということである。例えば、アメリカ英語での「現在完了形から過去時制への転換傾向」というのは、その典型例であろう。言うなれば、言語の「**回帰現象**」である (cf. 伊関 2013, pp.128-9)。英語は時代を遡れば遡るほど、ドイツ語との用法上の共通点が多くなるということはよく言われていることである。**Simple is best.** (省エネの原理) が働くということは、ある意味昔に戻っている傾向にあるとも言えるであろう。なにしろ、昔は現在時制と過去時制しかなかったわけであるから (cf. 岩垣 1980, p.34)。

つまり、**Simple is best.**、「言語における省エネ現象」、「アメリカ英語における回帰現象」ということを説明するには、歴史言語学の研究成果を活用することが重要であるということを意味するのである。今後、その重要性はさらに増すことであろう。

さらに、「言語の普遍性」ということを追究していくためには、ドイツ語など他の言語との比較研究も重要になってくるであろう。

今後取り組まなければならない課題は、未だに山積している。

ただし、アメリカ英語の用法というのは、言語に対する新しい側面を取り入れているだけではなく、イギリス英語よりもかえって保守的な側面も併せ持っているという指摘もあるので、十分な配慮も必要である。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、釧路工業高等専門学校一般教育科教授の小田島本有先生に貴重な御助言を頂いた。ここに厚く感謝の意を表する次第である。

## 参 考 文 献

### 辞典

小西友七・南出康世(編) (2001<sup>3</sup>) 『ジーニアス英和辞典【第3版】』東京：大修館書店。

\_\_\_\_\_ (編) (2006<sup>4</sup>) 『ジーニアス英和辞典【第4版】』東京：大修館書店。

Quirk, R. (編) (1995<sup>3</sup>) 『ロングマン現代英英辞典【第3版】』東京：丸善。

安藤貞雄 (1996) 『英語学の視点－開拓社叢書3－』東京：開拓社。

- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. London: Longman. (中右実訳『意味と形』東京：こびあん書房, 1981)
- Close, R. A. (1975) *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.
- 伊関敏之 (2000)「主節と従属節の関係について—学校英文法の視点から—」『東北英語教育学会研究紀要』No.20, 28-37.
- \_\_\_\_\_ (2011)『英語の研究と教育—ことばの世界への誘い—』東京：成美堂.
- \_\_\_\_\_ (2012)「現在完了形の用法に関する一考察—過去時制、現在完了進行形との比較を中心に—」『北見工業大学人間科学研究』第8号, 25-42.
- \_\_\_\_\_ (2013)『言語研究の楽しみ—ことばの不思議な世界—』東京：成美堂.
- \_\_\_\_\_ (編) (2014)『これからの英語の研究と教育—連携教育の展望と課題—』東京：成美堂.
- 岩垣守彦 (1980)『英語の要点【上巻】』静岡：増進会出版社.
- 北尾泰幸・西田晴美・林姿穂・Covert Brian (2009)『いま始めよう TOEIC テスト』東京：朝日出版社.
- 中川信雄 (編) (1996)『英文法がわからない！？—参考書にのっていない、でも知りたい200の疑問』東京：研究社.
- 中尾俊夫 (1979)『英語発達史』東京：篠崎書林.
- \_\_\_\_\_ (1989)『英語の歴史』講談社現代新書. 東京：講談社.
- 中尾俊夫・寺島廸子 (1988)『図説英語史入門』東京：大修館書店.
- 岡田伸夫 (監修) (1998<sup>2</sup>)『ニューアクションβ 高校総合英語【改訂2版】』東京：東京書籍.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English language*. London: Longman.
- 宍戸真・Nordyke Kai (2009)『Reading Expert I リーディングエキスパート—基礎編—』東京：成美堂.
- 桜木紫乃 (2012)「夏の稜線」『水平線』120. 東京：文藝春秋.
- 鈴木英一・安井泉 (1994)『現代の英文法第8巻動詞』東京：研究社出版.
- ターニー・アラン (1988)『英語のしくみが見えてくる—英語のクセをつかめ—』東京：光文社.
- 安田一郎 (1970)『NHK続基礎英語英語の文型と文法』東京：日本放送出版協会.